

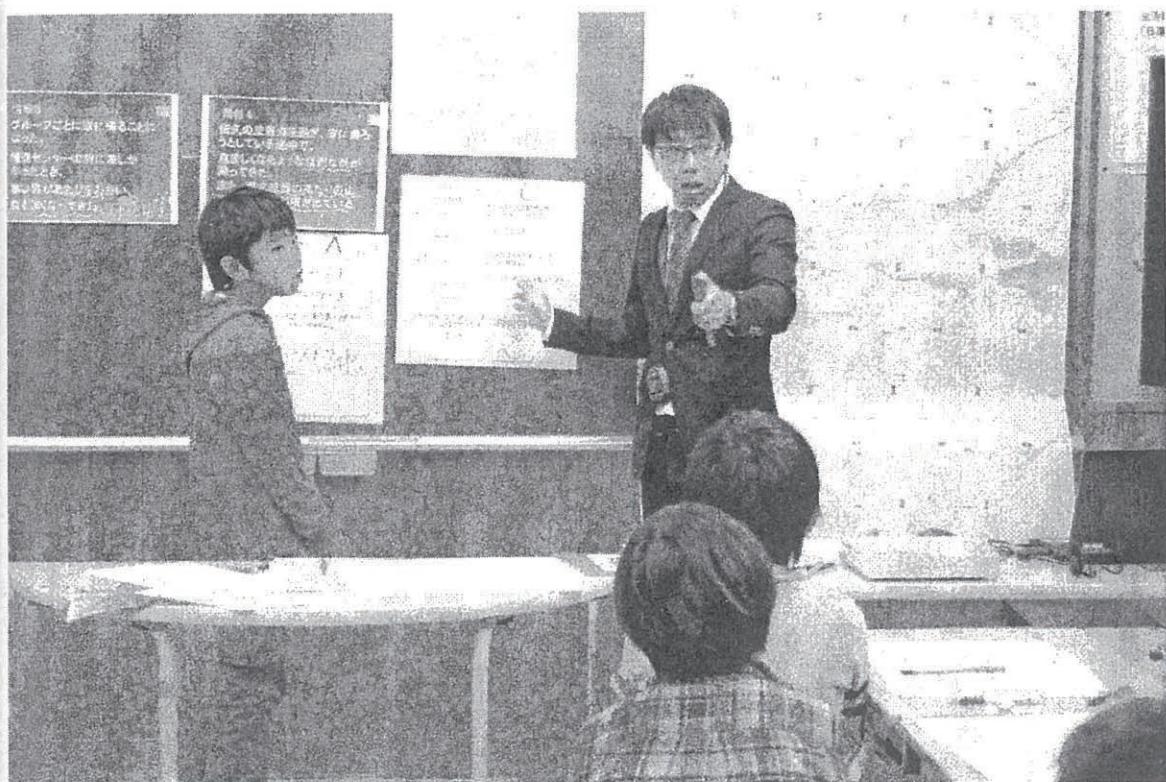
平成 27 年度（第 59 回）

岩手県教育研究発表会発表資料

17 「いきる・かかわる・そなえる」分科会

児童の主体性を育て、実践力を高める指導はどうあればよいか

～「いわての復興教育」における副読本の効果的な活用を通して～



平成28年2月10日(水)

零石町教育委員会

零石町立安庭小学校

目 次

I 研究計画

| | |
|-----------------|---|
| 1 研究主題 | 2 |
| 2 主題設定の理由 | 2 |
| 3 研究目標 | 3 |
| 4 研究仮説 | 3 |
| 5 研究内容 | 3 |
| 6 研究方法 | 3 |
| 7 研究全体構想図 | 4 |

II 研究の基本的な考え方

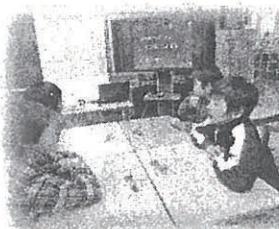
| | |
|------------------------------------|----|
| 1 児童の実態と本校復興教育の方向性について | 5 |
| 2 児童の主体性を育て、実践力を高める指導とは | 5 |
| 3 本校の復興教育における「防災教育」の位置づけについて | 5 |
| 4 研究仮説 1について | 5 |
| 5 研究仮説 2について | 10 |

III 研究の実際

| | |
|--------------------|----|
| 1 今年度めざす児童の姿 | 11 |
| 2 実践事例 | 12 |
| 3 その他の実践 | 22 |

IV 研究のまとめ

| | |
|---------------|----|
| 1 研究の成果 | 24 |
| 2 研究の課題 | 24 |



I 研究計画

1 研究主題

児童の主体性を育て、実践力を高める指導はどうあればよいか
～「いわての復興教育」における副読本の効果的な活用を通して～

2 主題設定の理由

(1) はじめに

本校では、「いわての復興教育」を積極的に推進するため、平成26年6月に保護者や地域の方々を対象とした授業参観の際に、全学年で復興教育副読本を活用した授業を行った。このことにより、広く保護者や地域の方々に「いわての復興教育」の概要や具体的な取り組みについて理解をいただくことができた。また、学校と家庭、地域が連携して防災に関して取り組んでいくことの大切さを共有することができた。

さらに、平成27年度は、岩手教育委員会より「防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業：モデル校『復興教育副読本の効果的な活用に関する研究』」の指定を受け、1年間研究に取り組むこととなった。

そこで、昨年度の実践を踏まえ、「復興教育副読本」を活用した望ましい授業の在り方について実践を通してその指導方法を明らかにするとともに、行事や体験活動、地域と連携した取り組みとの関連を充実させることにより、たくましく課題に立ち向かい、よりよく主体的に生きていこうとする児童を育成することを目指していくものとする。

(2) 児童の実態から

本校の児童は、素直でよく教師の話を聞き、課題や与えられた仕事に真面目に取り組もうとする。しかし、「自ら課題を見つける、進んで物事に取り組む・挑戦する、自ら考えて行動しようとする」といった面にやや弱さが見受けられる。その理由について、安全・防災教育の視点から考えると、これまで行ってきた避難訓練等は、決められた内容や行動を訓練することに終始して児童の思考や判断を伴う学びになっていなかつたことや、「なぜ安全・防災について学ばなければならないか」という必要感を十分に感じさせてこなかつたことによるものと考える。

そこで、本校では、「いわての復興教育」が教育的価値として掲げている「いきる」「かかわる」「そなえる」の中で、特に防災について実践力を高める「そなえる」の内容を重点として取り組むこととした。

また、「そなえる」の学習内容は「いきる」「かかわる」と大きく関わっており、単元にそ

それぞれ意図的に位置付けることによって、3つの教育的価値に効果的に触れることができると考える。

(3) 「いわての復興教育」における防災教育について

「いわての復興教育副読本」における「そなえる」編の構成は、自然災害発生のメカニズムを扱う知識の分野と災害発生時に身を守り、生き抜くための技能の分野からなっている。

そこで、「いわて復興教育副読本」を活用して「知識」「訓練」「活動」が結び付くカリキュラムづくりを行い、児童に的確な思考と判断、適切な意思決定・行動選択を行わせることで主体的に身を守る実践力を育てていきたい。

3 研究目標

本県「復興教育」の目指す「復興・発展を支える人づくり」を踏まえ、主に防災教育に関して「復興教育副読本」の効果的な活用の研究を通して、児童の主体性を育て実践力を高める指導の在り方を明らかにする。

4 研究仮説

「いわての復興教育」において、副読本を次のように活用すれば、児童の主体性と実践力が育つであろう。

- (1) 「いわての復興教育」の学習において、児童が学びの動機をもち、学ぶ方法を理解して学習に望めるようにするため、年間指導計画に教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」の具体項目を意図的に配置し、その学習に副読本を効果的に活用していく。
- (2) 「そなえる」の学習に児童が「思考」「判断」「表現」する場面を位置づけていく。

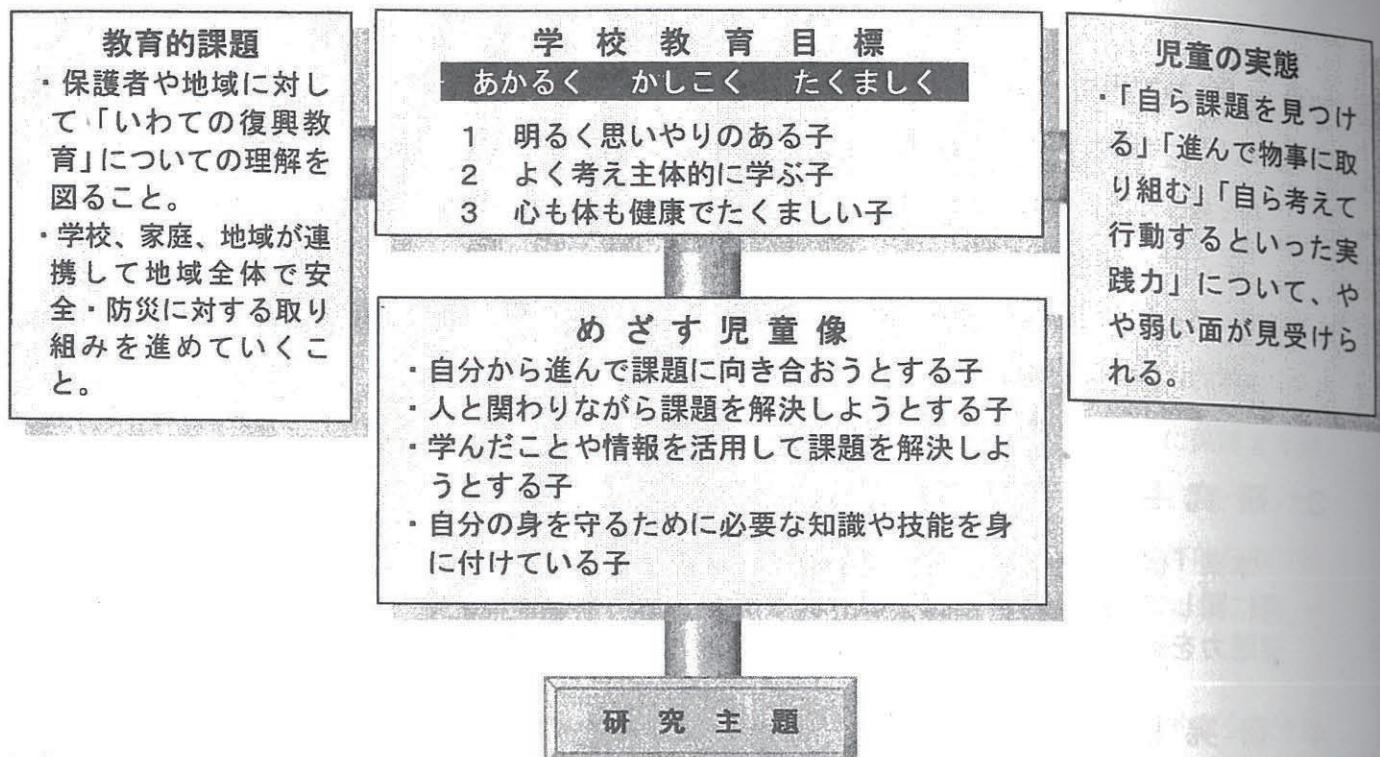
5 研究内容

- (1) 全学年の年間指導計画の作成
- (2) 「いわての復興教育」の三つの教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」を位置づけた単元の構成
- (3) 「復興教育副読本」の効果的な活用の在り方
- (4) 児童が「思考・判断」する場を位置づけた「そなえる」の授業実践

6 研究方法

- (1) 実践研究 授業実践、授業研究会、日常実践
- (2) 理論研究 文献、先行研究、講師招聘
- (3) 先進校視察 先進校への視察（東京都日野市立平山小学校）

7 研究全体構想図



児童の主体性を育て、実践力を高める指導はどうあればよいか ～「いわての復興教育」における副読本の効果的な活用を通して～

研究仮説

「いわての復興教育」において、副読本を次の様に活用すれば、児童の主体性と実践力が育つであろう。

- (1) 「いわての復興教育」の学習において、児童が学びの動機をもち、学ぶ方法を理解して学習に望めるようにするため、年間指導計画に教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」の具体項目を意図的に配置し、その学習に副読本を効果的に活用していく。
- (2) 「そなえる」の学習に児童が「思考」「判断」「表現」する場面を位置づけていく。

研究内容

- (1) 全学年の年間指導計画の作成
- (2) 「いわての復興教育」の三つの教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」を位置づけた单元の構成
- (3) 「復興教育副読本」の効果的な活用の在り方
- (4) 児童が「思考・判断」する場を位置づけた「そなえる」の授業実践

I 研究の基本的な考え方

児童の実態と本校復興教育の方向性について

本校は、全校児童数が80名の学校で、各学年1クラスの他に情緒と難聴の学級を有している。児童はとても素直で、何事も真面目に取り組み、様々な分野で成果を上げている。また、家庭や地域からも大切に見守られ、安定した生活を送っている。しかし、与えられた機会や課題をこなすことはできても、自らの課題や問題点を見つけたり、自らの動機で「自分ごと」として物事に取り組もうとしたりする積極的な姿勢にやや欠ける面が見受けられる。

また、本校では、豊かな人間性を育むため、「人・もの・こと」との関わりを前提とした体験的活動を多く含む教育活動を継続して展開している。以上のことから、本校の復興教育を進めるにあたり、本校児童の課題や今までの教育活動を整理し、系統性を図っていくことが大切であると考えた。

児童の主体性を育て、実践力を高める指導とは

児童の主体性を育てるによりめざす児童の姿

- 自分から進んで課題に向かおうとする子
- 「ひと・もの・こと」とかかわりながら解決しようとする子

実践力を高めることによりめざす児童の姿

- 自分の身を守るために必要な知識や技能を身に付けている子
- 自分で情報を把握し、判断できる子

3 本校の復興教育における「防災教育」の位置づけについて

「いわての復興教育」は、災害からの立ち直りと今後の備えといったわくをこえ、【郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成する】ことがねらいである。

したがって、被害が少ない内陸部にあっても「児童が自らの在り方を考え、これから社会をつくることができるようとする」という意義はとても重要であり、すべての教育活動の根幹と捉えることができる。

また、地震や津波のほかに今後起こり得る災害への備えから、「防災教育」の充実が求められている。そこで、発達段階に応じて実践力としての防災力を児童に身に付けさせていくことが必要であり、そのために、すべての教育活動の中に計画的に防災教育を位置づけて取り組んでいくことが大切であると考える。

以上のことから、本校の復興教育では、防災に関わる「そなえる」について、特に取り上げて取り組むこととした。

4 研究仮説1について

研究仮説1

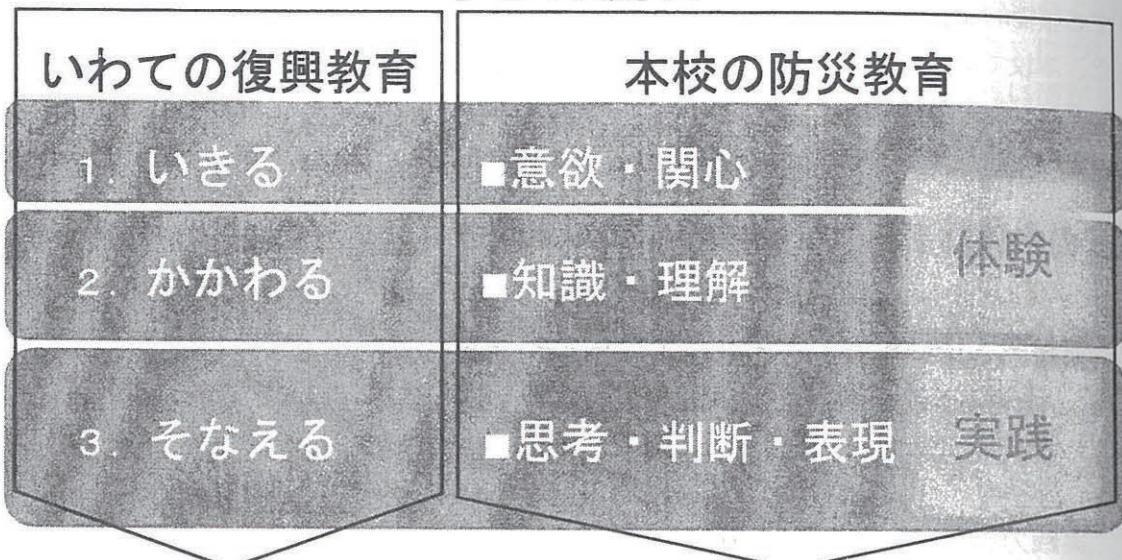
「いわての復興教育」の学習において、児童が学びの動機をもち、学ぶ方法を理解して学習に望めるようにするために、年間指導計画に教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」の具体的項目を意図的に配置し、その学習に副読本を効果的に活用していく。

(1) 学びの流れについて

文部科学省『「生きる力」を育む防災教育のねらいと展開例』をもとに、主体性と実践力を身に付けた子どもを育成するための本校の防災教育の「学びの流れ」を次のように考えた。

何よりも児童が意欲をもち、体験活動や教科等の学習で得た知識・理解をもとに思考・判断・表現するという学びの順序こそが大切であると考える。

学びの流れ



参考資料：学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育（文部科学省）

また、復興教育の「いきる」の価値項目は、意欲・関心をもたせ、動機づけする過程に位置づけ、「かかわる」の価値項目は、体験や知識・理解の過程に位置づけていく。ねらいに迫る「そなえる」の価値項目は、実践力を高める過程に位置づけていくこととした。

(2) 「いきる」「かかわる」「そなえる」3つの教育的価値の位置づけについて

【いきる】の教育的価値では、震災津波の経験を踏まえた「生命の大切さ」や「心のあり方」などの学習を通して、復興教育への意欲・関心をもたせる場と考える。復興に向けて力強く立ち上がっている方々の姿や、自分の地域の災害についての実状に触れることで、必要感・切実感をもって学習に臨む構えが構築される。意欲や関心をもって関わることが、以降の復興教育の学習活動の基盤となるため、自ら問題を見出し、問題意識を醸成するように意図的な活動を仕組んでいく。

【かかわる】の教育的価値では、震災津波の経験を踏まえた「人の絆の大切さ」や「地域づくり」などの学習を通して、気付きを促し意識を深める場と考える。親子のつながりや家族の絆、地域の人々と助け合うことの大切さを実感することで、家族の幸せや地域活動に積極的に行動するようになる。自分から進んで実践しようとする心情を育てることは、「いわての復興教育」の目的である「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材」の育成や本校の研究主題である「児童の主体性を育てる」指導の在り方に直結するものである。

【そなえる】の教育的価値では、震災津波の経験を踏まえた「自然災害の理解」や「防災や安全」

などの学習を通して、実践力を育成する場と考える。災害に対する備えについて考えたり、危機を予測したり避難行動を考えたりすることにより、実践力が身に付くと考える。

本校の復興教育が目指すのは、防災・安全にかかわる実践力を身に付けさせることであり、教育的価値「そなえる」の内容を中心として取り組んでいく。

(3) 指導計画の組み立てについて

指導計画の組み立てについては、はじめの段階の「いきる」を主に行事や道徳と関わらせながら学びの動機や意欲・関心をもたせる。次に「かかわる」の段階では、教科や総合的な学習の時間で、体験させたり知識や理解を深めたりする。最後の「そなえる」の段階では、主に特別活動や総合的な学習の時間を中心に、「思考・判断・表現」する力や実践力を育成する段階とする。さらに、避難訓練などの行事を実践の場として計画した。

防災教育に関わる年間の指導時数は、1・2年生は15時間程度で、教科や道徳、特別活動と行事を関わらせながら指導計画を作成した。3~6年生は25時間程度で、教科や道徳、総合的な学習の時間、特別活動と行事を関わらせながら指導計画を作成した。

はじめに、各学年の防災教育の目標を発達段階に応じて設定し、次に、目標に沿って学年ごとに主となる「そなえる」の教育的価値にあたる学習内容を決めた。その学習活動に思考・判断させる場面を設定し、実践力を育てる指導計画の中心とした。そして、各教科の年間指導計画から、具体的の21項目のねらいや知識・理解の内容に合致するものを取り上げ、「そなえる」における思考・判断のもととなるものとして、主に「かかわる」の過程に位置づけた。

また、年間の行事をそれぞれ3つの教育的価値や具体的な21項目と関連させて整理し、計画に盛り込んだ。なお、年間計画の立案にあたっては、各教科・領域等の目標との整合性を確認し、それぞれの学習内容が十分保障されるよう留意した。

(4) 復興教育副読本の活用について

副読本の活用については、次のような方法を考え、柔軟に活用した。

- 副読本の記述や資料をそのまま活用する。
- 副読本の記述や資料の一部を活用する。
- 副読本の記述や資料の内容を必要に応じて修正、加工し活用する。
- 複数の資料と関連付けて活用する。
- 副読本を参考に、地域やねらいに合わせて新たな教材を作成し活用する。
- 副読本や指導資料の展開を参考に、教育的価値が身につくような活動を行う。
- 防災教育に関連した教科（理科等）の学習に、一部を資料として活用する。

また、月末の朝読書の時間に、全校で復興教育副読本を読む時間を設定した。あわせて、本校では災害や復興に関する図書を学級文庫に備えており、副読本とともに震災や復興の状況、災害発生のメカニズムなどについて、日常的に関心を高めることができるようしている。

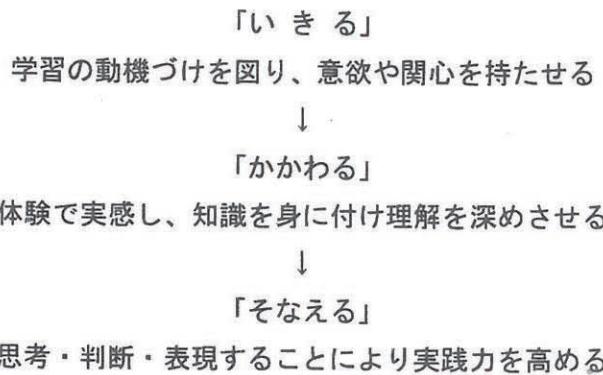
さらに、朝の会や帰りの会で災害や異常気象、被災地復興のニュースなどと関連させて活用するなど、副読本を身近なものとして手元に置き、触れさせるようにした。

(5) 防災教育指導計画の立案

教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」の具体項目の意図的な配置

ア 今年度、本校の防災教育の目標は、2月に実施する避難訓練の実践の場でめざす児童の姿として設定した。この目標を目指し、特別活動を中心に各教科・領域、道徳等を関係づけながら指導計画を作成した。

イ 学びの順序は「いきる」「かかわる」「そなえる」の流れを意図して計画する。



ウ 単元全体をひとつの流れとしたり、学習のまとまり毎に3つの価値の流れを繰り返したりするなど、柔軟に構成する。

エ 副読本との関連については、資料の目標、特色・背景、学習内容、指導展開が対応するものを全て取り出した。

教科で補助的な教材として活用したり、領域等を中心または補助的な教材として活用したりする。

また、これまでの学習や活動の目標を、副読本の価値を参考に見直し修正するなど、指導計画立案の拠り所とした。

オ 今年度の防災教育は、指導計画を作成しながら進めしており、実践の中で修正、改良を加えている。

2月の避難訓練の際の目指す児童の姿を年間の目標とする。



この学びのまとめを繰り返す。

5年生の防災教育の知識・理解として重要な学習のため、指導計画に記載している。

避難訓練の実践の場を、防災教育の1年間のまとめとする。

1年間の学びをふりかえることにより、次学年の学びの意欲をもたせる。

平成27年度 安庭小学校 第3学年 防災教育 指導計画

| | |
|-------|--|
| 教育の目標 | 災害に応じた避難方法を理解し、自ら安全な行動をしている。 |
| 元名 | 自分の命は、自分で守る。 |
| 元目標 | 【意欲・関心】身の回りの様々な危険の原因に気付いている。 【知識・理解・体験】災害について基本的な現象と危険について理解している。 |
| 育的要素】 | 【思考・判断・表現 実践】自分の住む地域の災害時の危険予測と避難の仕方を考えている。 |

| 価値 | 指導計画 | 副読本との関連 |
|---|----------------------------------|---|
| 教科・領域等 | 「単元名・活動テーマ」 【教育的要素】 | 【具体的な21項目】 |
| ○目標 | 「具体的な21項目」 | 「題材名」 |
| 総合的な学習の時間 | 「自分の命は自分で守る」 【意欲・関心】 | ①【かけがえのない生命】 「はるかのひまわりロード」 |
| ○本単元の主な学習内容と目的を考え、進んで行おうとする心情を育てる。 | | |
| 特別活動 | 「JRC活動」 【知識・理解・体験】 | ⑪【ボランティア】 「協力し合うって、楽しい」 |
| ○青少年赤十字の活動を知り、自分から進んで実践しようとしている。 | | |
| 特別活動 | 「室内・学校の安全」 【知識・理解・体験】 | ㉚【学校・家庭・地域での日頃の備え】 「みんなで、ぼうさい力を高めよう」 |
| ○地震発生時の危険について理解し、身の守り方・避難の仕方を考えている。 | | |
| 特別活動 | 「避難訓練」 【思考・判断・表現】 | ㉛【身を守り、生き抜くための技能】 「ショートくん練をやってみよう」 |
| ○地震に対する避難方法を理解し、危険回避行動をどうすればよいか考えている。 | | |
| 道徳 | 「ホタルの引っ越し」 【意欲・関心】 | ①【かけがえのない生命】 「生きのこったイトヨ」 |
| ○自分が暮らしている安庭の人々や自然やよさについて考える。 | | |
| 特別活動 | 「大雨災害 そなえあればうれいなし」 【意欲・関心】 | ㉚【学校・家庭・地域での日頃の備え】 「家族で地震にそなえましょう」 |
| ○身近に避難が必要な災害が起きていることを知り、防災学習の必要性を感じている。 | | |
| 総合的な学習の時間 | 「安庭を探査しよう！景観学習」 【知識・理解・体験】 | ⑫【復旧・復興へのあゆみ】 「津波を乗り越えて一奥尻島」 |
| ○景観学習を通して、自分達の住んでいる郷土を愛する心を育てる。 | | |
| 体育 | 「着衣水泳」 【知識・理解・体験】 | ㉚【学校・家庭・地域での日頃の備え】 「そのとき、どうする？」 |
| ○服を着た状態で泳ぐ難しさを知り、対応の仕方が分かる。 | | |
| 総合的な学習の時間 | 「調べたことを発表しよう」 【思考・判断・表現】 | ㉕【東日本大震災津波の様子と被害の状況】 「東日本大震災」 |
| ○発表会を行い、今後の学習の発展について話し合う。 | | |
| 総合的な学習の時間 | 「せんとでも！」 【意欲・関心】 | ㉔【自然との共存】 「しぜんとともに」 |
| ○自然の豊かさと厳しさ、自然と共に生きることについて考える。 | | |
| 総合的な学習の時間 | 「安庭地区の防災マップを作ろう」 【知識・理解・体験】 | ㉑【地域づくり】 「防潮堤を見て学ぶ一宮古市田老」 |
| ○自然との共存について考え、自分の身を守ることについて必要感をもつ。 | | |
| 総合的な学習の時間 | 「安庭地区を探査しよう」 【思考・判断・表現】 | ㉚【学校・家庭・地域での日頃の備え】 「みんなで、ぼうさい力を高めよう」 |
| ○地域を見て回り、危険個所や危険度を防災マップに書きこむ。 | | |
| 特別活動 | 「避難訓練」 【思考・判断・表現】 | ㉙【災害時における情報の収集・活用・伝達】 「きん急地震速報」 |
| ○地震や火災に対する避難方法を理解し、危険回避行動をどうすればよいか考えている。 | | |
| 特別活動 | 「命を守る！その時あなたはどうしますか」 【思考・判断・表現】 | ㉚【学校・家庭・地域での日頃の備え】 「そのとき、どうする？」 |
| ○安全に避難するにはどう判断したらよいか、主体的に考えている。 | | |
| 理科 | 「太陽と地面の様子」 【知識・理解・体験】 | ㉗【自然発生のメカニズム】 「急な大雨・かみなり・たつまき」 |
| ○日なたと日陰の地面の様子を調べ、太陽と地面の関係について考える。 | | |
| 総合的な学習の時間 | 「防災のことを伝えよう」 【思考・判断・表現】 | ㉔【復旧・復興へのあゆみ】 「防潮堤を見て学ぶ一宮古市田老町」 |
| ○防災マップを2年生に分かりやすく伝えるにはどうしたらよいか考える。 | | |
| 総合的な学習の時間 | 「調べたことをまとめよう」 【思考・判断・表現】 | ㉔【自然災害の歴史】 「岩手の主なさいがい」 |
| ○発表練習を通して、災害から身を守るためににはどんなことが必要か考えを深める。 | | |
| 総合的な学習の時間 | 「2年生に伝えよう」 【思考・判断・表現】 | ㉑【地域づくり】 「防波堤を見て学ぶ一宮古市田老」 |
| ○発表会を行い、感想を交流したり今後の学習について話し合ったりする。 | | |
| 道徳 | 「ぼくのおばあちゃん」 【意欲・関心】 | ㉓【価値ある自分】 「家族のみんなに よろこんでもらったよ」 |
| ○家族を敬い、家族の一員として家庭を明るくして行こうとする心情を育てる。 | | |
| 特別活動 | 「三世代交流会・感謝の会」 【知識・理解・体験】 | ㉑【自分と地域社会】 「まけないぞうがつなぐきずな」 |
| ○家族や地域の人々と交流を通し、感謝の気持ちや協力することの大切さが分かっている。 | | |
| 特別活動 | 「命を守る！その時あなたはどうしますか2」 【思考・判断・表現】 | ㉚【学校・家庭・地域での日頃の備え】 「そのとき、どうする？」 |
| ○安全に避難するにはどう判断したらよいか主体的に考えている。 | | |
| 特別活動 | 「避難訓練」 【実践】 | ㉙【自然災害のライフラインへの影響】 「ライフラインって何？」 |
| ○災害に応じた避難方法を理解し、自ら安全な行動をしている。 | | |
| 総合的な学習の時間 | 「学習をまとめよう」 【思考・判断・表現】 | ㉔【夢や希望の大切さ】 「ゆめ先生がつたえたいこと」 |
| ○1年間の活動を振り返り、今後の学習の発展について話し合う。 | | |

5 研究仮説2について

研究仮説2

「そなえる」の学習に児童が「思考」「判断」「表現」する場面を位置づけていく。

(1) 思考力・判断力・表現力の育成について

本校のこれまでの防災教育は、一定の災害から身を守るために必要な行動や備え等を内容的に理解させ、対応について訓練するようなものであった。

しかし、現在の変化の激しい世の中にあって、これまで経験のないような規模の自然災害等が起こるなど、与えられた知識を習得することや技能の訓練だけでは対応できない状況にある。そこで、将来にわたってどんな場面に遭遇しても対応できる応用可能な力としての思考力、判断力、表現力を育成していくことが大切であると考えた。

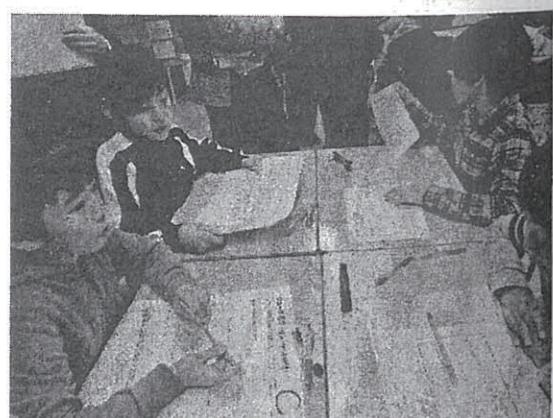
(2) 「思考」「判断」「表現」する活動の位置づけについて

思考・判断させる場面について、個人、グループ、全体といった学習形態について工夫していく。また、表現については、「かかわる」の学習と関連させ、特に相手意識をどのように持たせるかについて配慮していく。

(3) 教科・領域等における「思考」「判断」「表現」との関連について

教科・領域等における「思考」「判断」「表現」について、防災教育の内容や学習活動の特性に合わせて生かすようにする。

- 学んだことを生活とのかかわりの中で整理したり、実感を伴った思考を図ったりする→「科学的な思考力」
- 事象を比較したり関連付けたりしながら、多面的・総合的にとらえ公正に考える→「社会的な判断力」
- 言語を使って整理したり分析したりして考え、それをまとめたり表現したりして考えを深める→「総合的な表現力」

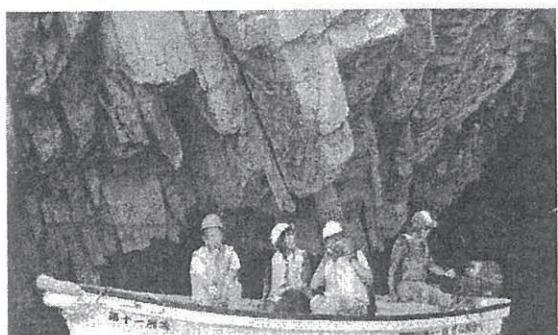


III 研究の実際

1 今年度めざす児童の姿

今年度は、2月に行う第3回避難訓練での児童の姿を想定し、発達段階に応じた目標を次のとおり設定した。

| 学年 | 目標 |
|----|--|
| 1 | 避難訓練の意義を理解し、周囲の人の指示に従い、安全に行動している。 |
| 2 | 避難訓練の意義を理解し、決まりや約束を守り、安全に行動している。 |
| 3 | 災害に応じた避難方法を理解し、自ら安全な行動をしている。 |
| 4 | 災害に応じた避難方法を理解し、自ら周囲の人と協力して安全な行動をしている。 |
| 5 | 災害に応じた適切な避難方法を身に付け、情報や状況から総合的に判断するとともに、自ら安全な行動をしている。 |
| 6 | 災害に応じた適切な避難方法を身に付け、情報や状況から総合的に判断するとともに、自他の安全を考えて、主体的に行動している。 |



2 実践事例

【いきる】の実践事例 ~身近な災害から防災学習の必要感をもつ~ 【意欲・関心】

| | |
|-----|--|
| 学年 | 3年 |
| 単元名 | 「大雨災害 備えあればうれいなし」 |
| 目標 | 身近に避難が必要な災害が起きていることを知り、防災バックに入れたいものについて考える活動を通して、防災学習の必要感をもつようにする。 |
| 副読本 | P. 46～47 「岩手県の主なさいがい」 中心価値「そなえる」 ⑯【自然災害の歴史】 P. 64 「家族で地震にそなえましょう」 中心価値「そなえる」 ⑰【学校・家庭・地域での日頃の備え】 |

《授業の実際》

最初に、零石町や岩手県で起きた大雨災害を取り上げ、大雨の災害の恐ろしさや命を守るために安全な場所に避難することが大切なことなどを考えさせた。

次に、非常時持ち出し品（防災バック）は何が必要か考えさせた。災害が起こったらどんな生活の変化が起こるのか予測させた。子どもたちは、「電気が止まる」「水が止まる」「ガスが止まる」「寒い」「食べられない」など実際の経験から考えていた。

更に、自分にとって「何が」「何のために」必要か、持ち物を選ぶ観点をはっきりさせてから個別に考えさせた。話し合い活動では、自分の選んだものが「何のために」必要なのか発表することができた。



何のために入れるのか考えを話している



実際の防災バックの中身を確認している

《副読本の活用》

過去に零石町で起きた大雨災害について知ることをきっかけに、復興教育を自分事としてとらえ、必要感をもって単元を通した課題づくりを行うことができた。

防災バックの存在を知り、「水道・電気・ガスが使えなくとも3日間生き延びるため必要な物」を備えるという目的をはっきりさせて活動をすることができた。

《授業の分析》

平成25年に零石町で起きた大雨災害の様子を導入段階に活用することで、災害が自分たちの身近なところで発生していることに気付き、自分事として主体的に学習に向き合う真剣な態度を育成することができた。また、具体的に防災バックの中身を考えることで日頃の備えが大事であることが実感できた。

《成果と課題》

身近な災害と副読本を関連付けて活用したことで、中心価値「そなえる」の資料を使って、意欲・関心を高めることができた。

災害発生後、生活がどのように変化するか具体的に考えた上で、防災バックの中身を考えたことで、自分に「何が」「何のために」必要な物などの焦点化したか話し合いをすることができた。

自分自身が防災バックを背負って避難するという意識が薄かった。「自分が持てる重さ」「素早く避難できる」防災バックになっていない児童もいた。「重さ」や「量」に関しては確認すべきであった。

【いきる】の実践事例

~自分たちの未来や生き方を見つめる～ 【意欲・関心】

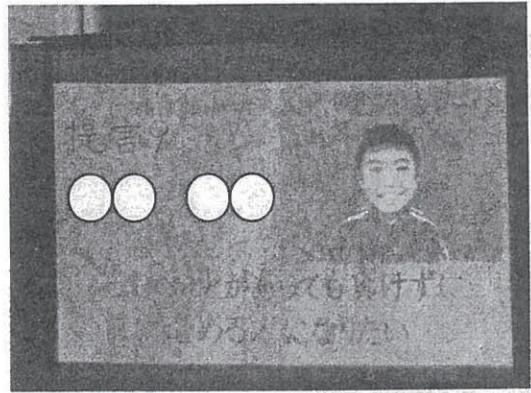
| | |
|-----|--|
| 学年 | 5年 |
| 単元名 | 「鉢ヶ崎のことを伝えよう」 |
| 目標 | 東日本大震災での津波体験からできた宮古市立鉢ヶ崎小学校の五つの提言をもとに、これから自分の生き方を見つめる。 |
| 副読本 | P. 34～35 「未来のために一五つの提言」 中心価値「いきる」 ④【夢や希望の大切さ】 |

《授業の実際》

7月に宮古市鉢ヶ崎地区にある熊野神社、浄土ヶ浜マリンハウス、宮古市魚市場を訪問して学んだことや感じたことを、10月の学習発表会で表現した。劇では、がれきの町の絶望的な場面から、海の怖さ、海の豊かさ、人々のエネルギー、そして鉢ヶ崎の人々の様子から感じたことから、自分たちの未来的生き方を考える「12の提言」の場面へつながるようにシナリオを作成した。シナリオは見学時の感想やしおりのメモ、写真などをもとに、総合的な学習の時間を使い、児童が中心となって考えた。



劇の練習風景



これからの生き方を見つめた「12の提言」

《副読本の活用》

7月に宮古市鉢ヶ崎地区の様子について、副読本を用いて事前学習を行った。さらに児童は副読本をとおして「鉢ヶ崎小学校5つの提言」というものがあることを知り、その提言をもとに「安庭小学校5年生 12の提言」を考えた。12の提言は学級の児童12人、1人ひとりが未来をどのように生きていきたいかという自分の生き方を見つめるものになった。

《授業の分析》

熊野神社、浄土ヶ浜マリンハウス、宮古市魚市場の3人の方々に聞いた被災の様子から、劇のシナリオ作成、そして劇練習をとおして、次第に児童に変容が見られるようになった。7月の訪問時点では、「津波は怖い」「鉢ヶ崎の人たちがかわいそう」という意識だけだったが、練習を重ねるうちに鉢ヶ崎の人々が伝えたかったことを考えるようになってきた。練習の終盤になると鉢ヶ崎の人々の思いを自分たちで伝えたいという思いが強くなり、演技にも磨きがかかってきた。

《成果と課題》

副読本を活用して、「震災の悲惨さ」だけでなく、「鉢ヶ崎の人々とのかかわりから、自分の生き方を見つめる」という段階まで児童に考えさせることができた。

「12の提言」を学習発表会だけで終わらせるのではなく、機会を見て振り返らせ、震災の悲しみやこれからの生き方を忘れないようにさせていきたい。

【かかわる】の実践事例

～危険個所を調べ、防災マップにまとめる～ [知識・理解・体験]

| | |
|-----|---|
| 学年 | 3年 |
| 単元名 | 「命を守れ！その時あなたはどうする？」 |
| 目標 | これまで地域について学習してきた経験や人々とのつながりを生かして、仲間と協力して災害時に地域で安全なところ・危険なところについて調べ、防災マップづくりを行う。 |
| 副読本 | P. 38～39 「防潮堤を見て学ぶ—宮古市田老」 中心価値「かかわる」 ⑬ 【地域づくり】 |

《授業の実際》

「もし、地震や大雨の災害が起った時、安庭地区はどうなるか」想像させながら、通学路にある注意する個所や安全な場所、施設を調査した。

防災マップ作成に必要な情報を収集し、危険の程度について話し合い、危険レベルを！マークの数で表した。作成した防災マップを見て、地域の特色を確認した。

大雨災害が起った時に、どのように行動すればよいか、防災マップを活用して考えることができた。



地域の危険な場所に注意しながら調べる



調べたことや気が付いたことをまとめる

《副読本の活用》

田老町の地域に応じた防災設備のあり方や人々の危機管理意識の大切さに触れることで、自分たちの町、暮らしを守ってくれる人や施設について理解を深めることができた。

副読本を活用することで、自分たちの町では災害を防ぐためにどんな施設や工夫があるのか、田老町の現状と比較しながら学習をすすめることができた。

《授業の分析》

地震や大雨災害が起きた時に、地域で安全なところや危険なところを知ることができた。危険個所は、通学路や地域の危険レベルを設定しながら把握した。学級全体で危険レベルの意識をそろえることで、防災マップを生かした避難を同じ危機管理意識で考えることができた。

《成果と課題》

子どもたちの調査した情報だけでなく、地域の方や保護者からの防災情報を生かした防災マップづくりを行ったことで、実際に活用可能な防災マップを作ることができた。

地域の安全な場所を調査することで、地域への安心・信頼を感じたり地域への愛着を育んだりすることができた。

防災に関する専門的な知識が不足していたため、危険レベルの設定が正しいかどうか判断がつかない場合があった。消防署や地域の防災課と連携して、正しい情報を収集していきたい。

【かかわる】の実践事例

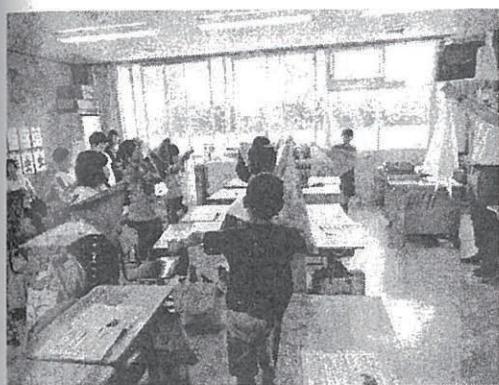
~応急手当の基本的な方法を身につける~ [知識・理解・体験]

| | |
|-----|--|
| 学年 | 4年 |
| 単元名 | 「応急手当のしかた」 |
| 目標 | けがの基本的な手当など、応急手当の基本的な方法を学ぶことで、地震や火災などの災害発生時や普段の生活においてけがをしたときに手当てができるようにする。 |
| 副読本 | P. 57 「応急手当のしかた」 中心価値「そなえる」 ⑩【身を守り、生き抜くための技能】 |

《授業の実際》

はじめに出血、骨折、やけどなど普段の生活の中でも起こりうるけがについて話し合いをした。実際にけがをことのある児童の話から、応急手当の大切さをとらえさせ、自分でもいざという時に応急手当ができるようになりたいという意欲をもたせた。

今回は三角巾、代用品として風呂敷を使っての応急手当のしかたを学ぶことを伝え、「圧迫」「固定」「被覆」の3つの役割があることを確認した。その後、実際に三角巾を使用しながら「圧迫止血」と「腕の固定」のしかたを練習した。



児童一人一人が三角巾のたたみ方と本結びのしかたを練習している

《副読本の活用》

授業の導入時に、地震や火災時または普段の生活の中で想定されるけがの種類を確認するために副読本の資料の一部を活用した。応急手当が必要な場面が、自分たちの生活の身近なところにあるということを再認識することができた。

《授業の分析》

児童全員が三角巾を使っての応急手当のしかたを体験することができた。「圧迫止血」と「腕の固定」という手当の基本的な方法を学ぶことで、応急手当のしかたを知っておくと、いざという時に役立つことがわかったようだ。

また、「今後何かあった時に、三角巾を使って手当をしたい。」という児童の感想から、災害や事故に対する心構えをもたせることができたと思われる。

《成果と課題》

児童一人一人が体験活動を通して、三角巾を使っての応急手当の基本的な知識を身につけることができた。また、災害発生時に備え、準備・練習しておくことの大切さを確認することができた。

さまざまな状況を想定しての対応、手当のしかたなどを児童と確かめていく必要がある。また、身につけたことを意図的に想起させ、実践的なものにしていく必要がある。

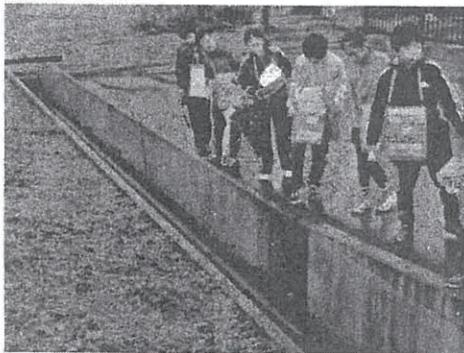
【かかわる】の実践事例

～体験を通して大雨の知識を習得する～ [知識・理解・体験]

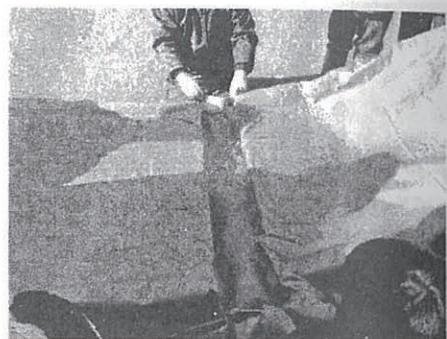
| | |
|-----|---|
| 学年 | 5年 |
| 单元名 | 「安庭小学区で大雨 そのとき どうする？」 |
| 目標 | 実際に地域を回りながらの体験や実験をとおして、大雨災害の様子やメカニズムを理解し、知識を習得する。 |
| 副読本 | P. 51 「急な大雨・かみなり・たつ巻」 中心価値「そなえる」 ⑯【自然災害発生のメカニズム】 |

《授業の実際》

本单元のゴールは、入手した情報から状況を判断して安全な行動を考えることである。しかし、児童に思考・判断させるためには、大雨の知識・理解が不可欠であり、またその知識は体験に裏付けられたものでなければならない。そこで、平成25年8月9日に零石町で発生した大雨災害の様子を学ぶことをとおして知識を習得させた。実際に地域の人から当時の様子を聞きながら調べ学習を行った。さらに、降水量の感覚をつかませるため、急な増水が危険であることを実感させるための簡単な装置を用いて実験した。理科「流れる水のはたらき」を発展的に扱ったり、帰りの会でトピックとして扱ったりした。



H25.8.9 の大雨災害の様子を確認している



急な増水について装置を用いて実験している

《副読本の活用》

副読本の中で大雨や土砂災害に関する部分を中心にして活用した。副読本の中には、p50の「台風のしくみと被害」、p51の「急な大雨・かみなり・たつ巻」の箇所しか該当する部分がないため、岩手県から発行されている防災教育DVDも合わせて活用した。副読本のコピーを教室に既習事項として掲示し、児童が学習したことを振り返りやすいように工夫した。

《授業の分析》

平成25年当時、児童は3年生で、記憶が曖昧になっていたが、自分たちで実際に地域を回ってみたことで、「～ミリメートルの雨だとこの辺は危ない」「この辺は坂になっているため、水が来て通れないだろう」などということを実感させることができた。また、動画を使って川が短時間で増水する様子を見せたが、簡単な実験装置を用いて試したことで、体験をとおした生きた知識を習得することができた。

《成果と課題》

単元終盤の思考判断の授業に生かされるように、習得させること精選し単元構成を考えることができた。

副読本の内容が、地震や津波に関するものが多くい。そのため、大雨や土砂災害の知識を習得させる時間すべてに副読本を活用することは難しい。

【そなえる】の実践事例

～安全に避難する方法を主体的に思考する～ 【思考・判断・表現】

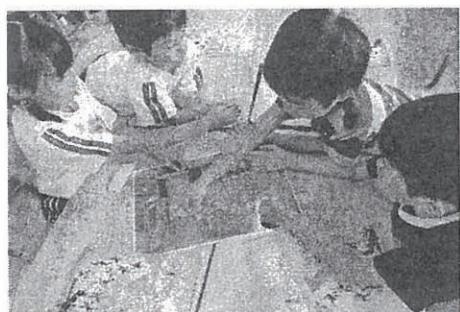
| | |
|-----|--|
| 学年 | 1年 |
| 単元名 | 「きょうしつのきけんをみつけよう」 |
| 目標 | 教室内における危険箇所を知り、もしも地震が起きたらどんな危険が考えられるか、どのように行動すれば自分の身を守れるのかを知ることができる。 |
| 副読本 | P. 56～57 「みんなで、ぼうさい力を高めよう」 中心価値「そなえる」 【身を守り、生き抜くための技能】 |

《授業の実際》

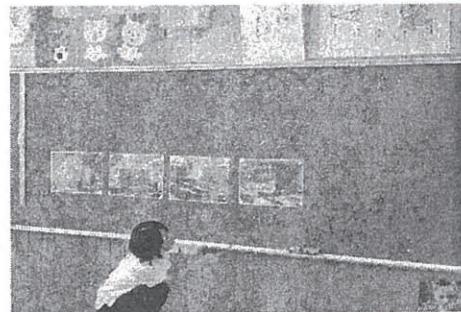
東日本大震災のとき、幼稚園や保育所、家庭などでどのように行動したかを想起させ、安全な場所に避難したことを思い出させた。その後教室内に目を向けさせ、どこがどのように危険なのかをグループごとに考えさせた。

教室内の異なる写真を見ながら、どうして危険だと感じたのかを話し合いながら危険箇所に印をつけていった。

それぞれのグループで話したことを全体に広げ、教室内の危険箇所と避難の仕方を確認した。



グループで危険箇所を話し合っている。



他のグループの内容を全体で確認。

《副読本の活用》

授業の終盤で、自分の身を守るための方法を学ぶ際に活用した。指導内容に応じて資料を活用することにより、知識としてすでに物事を知っている児童も、安全な避難の仕方について理解を深める一助となった。

《授業の分析》

自分たちが過ごす教室内にもたくさんの危険があることを理解することができた。本時では、友だちと考えを出し合うことによって、自分では気付かなかつた危険箇所に目を向けたり、なぜ危険なのかを考えたりすることができた。

《成果と課題》

副読本を活用し、自分たちの生活に置き換えて学習することによって、今まででは「指示を聞いて避難する」にとどまっていたものが、思考・判断を伴っての行動に変容していく様子が見られた。

学習したことが生かされていくよう、繰り返し指導にあたったり、発達段階や地域の特性に応じて習得させる知識や技能を見出したりしていくことが必要である。

【そなえる】の実践事例

～地震から身を守る方法を考える～

〔思考・判断・表現〕

| | |
|-----|---|
| 学年 | 2年 |
| 単元名 | 「命を守れ！その時あなたはどうする？」～音楽室で地震が起きたら～ |
| 目標 | 音楽室で大きな地震が起こったときの危険を想像し、安全な場所を見つけ、安全姿勢をとることができる。 |
| 副読本 | P56 「みんなでぼうさい力を高めよう」 中心価値「そなえる」 ㉚【学校・家庭・地域での日頃の備え】 |

《授業の実際》

まず、音楽室で大きな地震が起こったときに、どんな危険が考えられるかを話し合った。次に、今大きな地震が起きたという設定で、自分が安全だと思う場所で安全姿勢をとらせ、そこがなぜ安全と考えたのかを発表させ、音楽室の安全な場所について話し合った。

音楽室を授業場所とし、ここで大地震が起きたらどうなるかを、楽器や机等の教室の様子を見ながら、より現実的に考えられるようにした。

【自分が安全だと考えた場所で安全姿勢をとっている場面】



《副読本の活用》

安全と考えた場所について理由を発表し、話し合った後で、「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」、という「三つのない」場所を見つけることを副読本の資料で確認した。自分の考えの根拠としり合わせることができ、これからも自分で考え方行動しようとする気持ちをもたせることができた。

《授業の分析》

普段使用している音楽室で行ったことにより、現実に自分の身に起こるかもしれないという気持ちをもつことができ、自分のこととして考えることができた。また、安全だと思う場所で実際に安全姿勢をとらせ、理由を発表させたことにより、安全な場所とはどんなところなのかを具体的にとらえることができた。

《成果と課題》

実際にその場所で自分の身を守るためにどうするかを考えたことで、自分のこととして考え方判断する力を付けることができた。

学年の系統性を考え、2年生段階で身に付けさせたい力を明確にして指導していきたい。

【そなえる】の実践事例

~安全に避難する方法を主体的に判断する~ [思考・判断・表現]

| | |
|-----|---|
| 学年 | 3年 |
| 単元名 | 「命を守れ！その時あなたはどうする？」 |
| 目標 | 災害時に起こる様々な場面や行動について想定し、どのような理由でどう判断・行動するのかを話し合うことを通して、自分の命を守るために場面に応じたよりよい判断・行動をしている。 |
| 副読本 | P. 60～62 「そのとき、どうする？」 中心価値「そなえる」 ②【学校・家庭・地域での日頃の備え】 |

《授業の実際》

「一人で下校途中、学校から家までの真ん中あたりにいるときに、激しい雨が降り始めた。小学校への避難指示の防災無線がなっている。学校に戻るか、家に帰るか、どうする？」という場面設定をし、一人でいるとき、どのような避難行動をしたらいいのか考えさせた。

その際、地域の防災マップ作りで得た情報と体験をもとに思考・判断させた。実際に通学路を歩き、地震や大雨災害が起きたとき危険と感じる場所や危険レベルを確認した。

クロスロードゲームの手法を取り入れ、自分の考えをもったり、友だちの考え方や価値観を知ったりする活動を行った。グループ活動では、判断の根拠を明らかにしながら話し合わせた。



グループで判断の根拠を明らかにしている



防災マップの情報と関連付けて発表している

《副読本の活用》

授業の導入時に、教室・音楽室・下校途中の地震に遭遇した場合の行動の仕方を確認するために副読本の資料の一部を活用した。災害時の基本的な身の守り方を副読本から学ぶことで、様々な災害に対して状況に合った判断と自分で行動しようとする態度を育てることができた。

《授業の分析》

単元を通して「危険基準の共有化」の指導を大事にしてきた。現地に足を運び、自分たちの目で危険な状況を確認し、話し合いのもと危険レベルを設定した。学習を支える知識や体験を共有し、災害に対する危険意識の基準を合わせることで、同レベルで思考・判断が行われ、有効な話し合いが行われた。

クロスロードゲームを使ったことで、どのような理由で判断・行動するのか、話し合いのポイントを絞って、考えを深めることができた。また、主体的に判断するよさを味わうこともできた。

《成果と課題》

判断基準となる知識を体験的活動から得ることで、思考力・判断力を高める学習を主体的に取り組むことができた。

子ども達が正しい判断をするために、知識や体験を系統的に積み重ね、学年に合った思考・判断場面を経験させる必要がある。

指導案は、別途資料に掲載

【そなえる】の実践事例

～安全な行動の仕方を主体的に判断する～ 【思考・判断・表現】

| | |
|-----|--|
| 学年 | 5年 |
| 単元名 | 「安庭小学区で大雨 そのとき どうする？」 |
| 目標 | これまで学んだ大雨の知識や経験をもとにしたり、友だちの考えを聞いたりしながら、状況に応じたより安全な行動の仕方を思考・判断している。 |
| 副読本 | P. 58~60 「そのとき、どうする？」 中心価値「そなえる」 ②【学校・家庭・地域での日頃の備え】 |

《授業の実際》

「前の日から弱い雨が降り続いている。今、あなたたちはある地区のある地点でゲームをしている。テレビを見ると大雨注意報と洪水注意報が発令された。」という場面設定をし、同じ方向に自宅がある児童同士がグループになって、どのような行動をしたらいいのか考えさせた。

その際、副読本を活用したり、実験装置を用いたりして得た知識、また実際に平成25年に東石町で実際に発生した大雨災害の様子を見て回った体験をもとにしたりして、思考・判断させた。

これまで身に付けた知識で構成された情報が次々に出され、身の回りの状況が変化する中で、情報から災害の発生や規模を予測して安全な行動の仕方を話し合わせた。



情報をもとに安全な行動を話し合っている



掲示された大雨の知識を活用している

《副読本の活用》

単元をとおして、理科の授業と帰りの会でのトピックとして、副読本を活用して知識を習得させた。副読本の資料は単元の終盤で思考・判断するために必要な知識にしおり、教室に掲示して、児童が考えるための拠り所とさせた。本時では掲示された内容をもとに児童が話し合いをする場面が多くみられた。

《授業の分析》

単元をとおして、体験と知識を関連付けて大雨災害の学習をしてきたため、児童にしっかりと知識が身についていた。本時ではその知識を活用して、安全な行動を思考・判断することができた。また、個人で考える場面、グループで考える場面、グループの発表から考える場面を設けたことで思考がより深まった。

《成果と課題》

思考場面で、思考の観点を具体的に設けたことで、児童が何を考えればよいか明確にすることができた。児童が判断したことを専門家の視点から評価してもらうため、町の消防や防災課との連携を図ったことが効果的だった。

授業構成を2時間扱いにするなどして、児童が思考・判断するための時間を十分に確保する必要がある。

指導案は、別途資料に掲載

【なえる】の実践事例

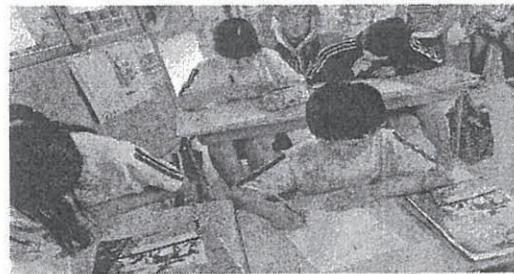
地域で起きる災害に備え、自分の身の守り方を考える～ [思考・判断・表現]

| | |
|----|---|
| 年 | 6年 |
| 元名 | わたしたちにできること |
| 標本 | 地域の災害の特性や防災体制について理解し、災害によって引き起こされる危険を予測し災害時には、自らが危険を回避できる行動ができるようになる。 |
| 書本 | P. 34～35 「未来のために一五つの提言」 中心価値「かかわる」⑬【復旧・復興への歩み】 |

授業の実際》

地震・津波・風水害発生のメカニズムについてそれぞれの班が調べてきたことを発表し、それぞれの特徴をえた。その後、零石町内で起きた平成25年8月9日の豪雨災害についてその当時の写真を見ながら想した。

の人たちが「その時どう行動したか」「災害後どんなことを考えたか」 インタビューをしたことをもと自分の身を守るために何が必要か家族とのような話し合いが必要か考えた。また、地域の災害の被少なくするために何が必要か考えた。



地域の人がどのように行動したのかインター
ビューによって学んだ

授業参観で、保護者へ自分の考えを発信した

副読本の活用》

単元を見通して、地域に関わり、自分と地域社会との関係を考えることができる児童を育てるために、「い」「かかわる」「そなえる」の価値項目を位置づけた。単元の導入で、副読本を活用して命の大切さを学び、自然災害について自分で調べたりした。授業の中では、資料の内容を地域に合わせて修正・加工し活用した。今後、地域に発信するためにどのような方法があるか副読本をヒントに調べていきたい。

授業の分析》

地域の人たちから、山津波があることや地域のダムが守ってくれることなど様々なことを学ぶことができ授業の中では家族とこれから話したいことでまとめとなつたが、地域に何ができるのか考えるきっかけとなつた。

成果と課題》

単元計画を立てることにより、計画的に副読本を活用することができた。

地域の人たちとかかわることにより、実際には体験していないことを身近に感じて、災害が起きてから行動を考えることができた。資料からの読み取りだけでなく、三人の地域の方のそれぞれの立場からのお話をことによって、より自分事として思考・判断することができた。

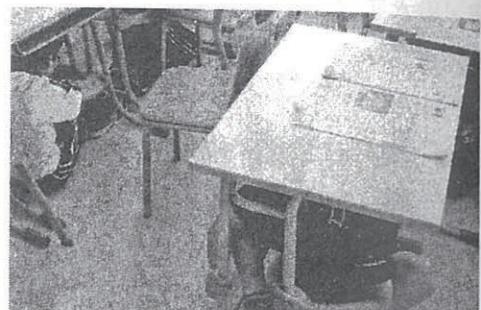
3 その他の実践

(1) 土曜参観日における復興教育副読本を活用した授業公開

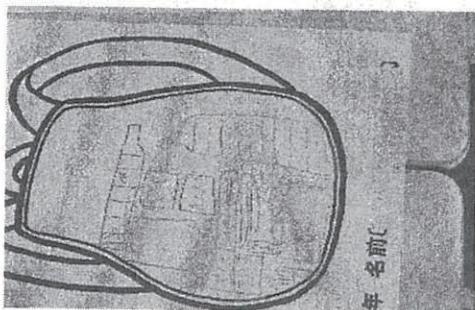
平成26・27年度第2回土曜参観日において、全学年で復興教育副読本を活用した防災教育の授業を行い、保護者や地域の方々に復興教育の実践について広く周知した。



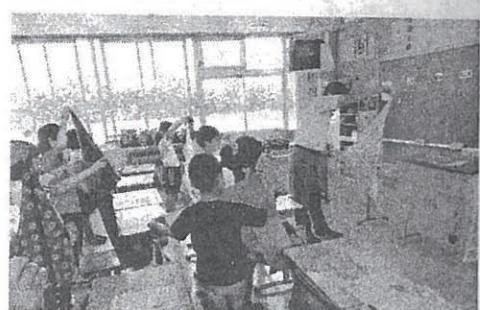
1年「きょうしつのきけんをみつけよう」



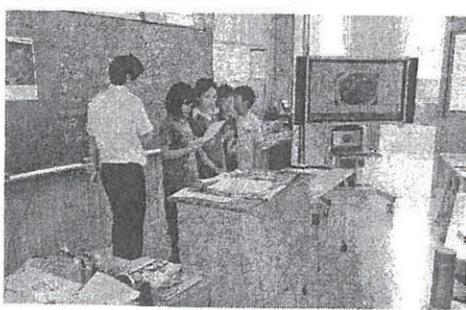
2年「音楽室でじしんがおきたら」



3年「大雨災害 そなえあればうれいなし」



4年「応急手当のしかた」



5年「宮古訪問 鍬ヶ崎について調べよう」



6年「地域の減災 わたしたちにできること」

(2) 5年生の年間の実践

5月 第1回避難訓練

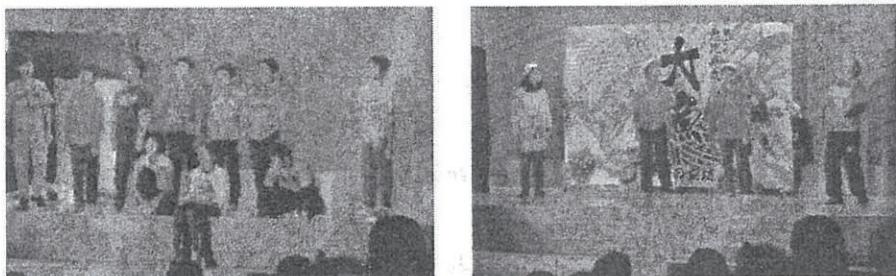
6月 土曜参観日 復興教育副読本を活用した授業

7月 鍬ヶ崎訪問 被災地を訪問し3人の講師から講話をいただく



9月 第2回避難訓練

10月 学習発表会 鍬ヶ崎訪問をきっかけに自らの生き方を考え発表した
劇「安庭小 5年 12の提言」の発表



12月 研究授業「安庭小学区で大雨 そのときどうする?」

2年前の零石の大雪災害と同規模の災害を想定した避難について考
えた。さらに災害についてのパンフレットを作成し、地域へ配付した。



2月 第3回避難訓練 1年間の防災学習のまとめの活動

被災地訪問を、学習のまとめではなく学習のきっかけとして位置付けたことにより、その後の復興教育を進める上で子ども達に強い動機づけとなった。

学習発表会の取り組みを通して、「被災地について知りたい」「何かをしたい」という考
え方から、自分を見つめ直し「自分はこう生きたい」という考え方へ変わっていった。課題
を自分事としてとらえるようになった。

地域の素材を活用したことで、地形の特徴や災害の様子など実際の情報を生かして、根
拠を持って思考、判断する実践的な学習をすることができた。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- ・指導計画に「いきる」「かかわる」「そなえる」の具体項目を意図的に配置したことにより、復興教育の学習に児童が関心を高め、意欲的に課題に向かって取り組むことができた。さらに、体験を通して知識や理解を深め、思考・判断し実践に向かう学習の流れができた。
- ・指導計画を作成することにより、ねらいが整理され学習内容が明確になるとともに、主となる学習活動と各教科・各領域の内容の関連づけが図られ、教科横断的な学習カリキュラムを作成することができた。また、指導計画の吟味により学習活動の重複を防ぎ、焦点を絞って指導することができた。
- ・地域教材を用いて必然性のある授業を行うことで、児童が「ひと・もの・こと」に主体的にかかわり、進んで課題に向かう姿が見られるようになった。
- ・児童が経験や既習事項を生かして思考したり判断したりする場面を組むことにより、自分の身を守るために自分で情報を把握し、判断する実効的な力が身についている。この「わがこと意識」や自ら考え判断し表現しようとする態度は、他の教科・領域の学習にも反映されるものと期待する。
- ・復興教育副読本を地域やねらい、児童の実態に合わせて柔軟に活用することにより、活用の幅が広がり、防災の備えや復興の歩みがより身近なものとなった。

2 研究の課題

- ・児童が深く思考・判断・表現するための手立てがまだ不明確であり、取り組むための共通理解が不十分である。発達段階に応じた適切な手立ての実践と検証が必要である。
- ・防災教育の目標を学年毎に設定したが、発達段階に応じた知識・理解、経験の内容の系統性については吟味が不十分である。特に災害のメカニズム等に関する知識・理解の内容は膨大であり、低学年から学ばせる知識・理解及び経験の内容を発達段階に応じて整理し指導していく必要がある。
- ・日頃から地域に暖かく守られ育まれている本校の児童にとって、保護者や地域と協働した防災の活動や地域貢献が望まれており、実現に向けた組織的な検討や工夫、啓蒙が必要である。